

TOPICS

最近の住宅トレンド

～天然素材の家～

シックハウス症候群への社会的関心の高まり、建築基準法の改正によるシックハウス対策の強化などから、天然素材を用いた住宅づくりが脚光を浴びはじめています。シックハウス症候群とは、住宅内に放出された化学物質の影響により、頭痛、吐き気、目の痛みなど様々な健康被害を生じさせる現象のことで、潜在患者数は600万人から1,000万人に及ぶともいわれています。



また、地球環境に優しい循環型社会形成といった観点から、わが国の住宅の寿命が欧米諸国に比較してきわめて短いことが問題視され、人工林の再生サイクル以上に使い続けることができる長寿命木造住宅が求められています。

このようなことから、健康に良く、耐久性のある建材として日本古来の建材が見直されてきているのです。調湿作用があり、適切な維持・管理によって100～200年は軽くもつといわれる「天然無垢材」、不燃材で、調湿作用があり、耐久性にも優れている「漆喰」、化学接着剤のかわりに用いられる「米のり」や「にかわ」（動物の骨や皮を煮たもの）などがその代表例です。

しかしながら、天然素材を用いた家づくりが更に普及していくためには、いくつかの課題も残されています。1つはコストの問題で



す。現状では天然素材を用いた住宅づくりは、一般の住宅に比べて建設コストが高くなっています。今後は、建設コストに加えて、維持管理コストや廃棄コストまで含めたライフサイクルコストで比較する視点も重要となってくるのではないのでしょうか。

2つ目は、消費者に対する素材知識の普及です。火災の場合、天然無垢材は、他の部分は燃えても柱だけは残り、石油建材のように有毒ガスを発生することもない。鉄は加熱されると急速に軟化して強度が低下してしまい、崩壊の危険もある。また、木材も虫を寄せ付けないために木材自体から化学物質を放出しており、これも多すぎると人体に影響を与えます。天然素材だから全て善しではありません。

住宅に限らず、天然素材や自然派商品など、健康重視をキーワードにした商品が見直されています。天然素材の家が単なるブームとして終焉してしまうのか否かは、ただ単に言葉のみに左右されるのではなく、真の内容を把握していくことがポイントではないのでしょうか。